

幼小接続スタートカリキュラムの一考察

－韓国における現況と課題－

金 玫志

A study of Preschool and Elementary School connection Start curriculum: Current Status in Korea and challenges

KIM, Minjee

要旨

本稿は、日本で実践されている幼小接続スタートカリキュラムにおける教育の連続性や一貫性の難しさを、韓国で先行された「ヌリ課程」の実態を明らかにすることで、さらなる課題を検討するためのものである。そこで、韓国で実施されている「ヌリ課程」の現状を踏まえ、今後の幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方を提示し、教育・保育制度として掲げている「幼児主導型」の意味を明らかにした。また、両国が目指す幼児教育・保育制度は、環境を通した子どもの主体性や創造性を育む視点において一致した観点をもっていることが明らかになった。さらに、幼児教育・保育制度の変動に対し保育者・教員養成の対策が追いついていない現状や家庭教育への疑問を投げた。

キーワード

ヌリ課程, 幼小接続, 遊び, 教師養成

Abstract

In this paper, to clarify the continuity of education and the difficulty of consistency in the early childhood connection start curriculum practiced in Japan, clarifying the actual situation of "Nuri curriculum" precedent in Korea, to further study the issue belongs to. Therefore, based on the current situation of "Nuri curriculum" being implemented in Korea, we will present a way of smooth connection between early childhood education and elementary school education, and the "infant-led" I revealed the meaning. In addition, it became clear that the early childhood education and childcare system that the two countries are aiming have a consistent viewpoint from the viewpoint of nurturing the subjectivity and creative nature of children through the environment.

Key words

Nuri curriculum, connection between preschool and elementary school, play, teacher training

I. はじめに

明治期以来、伝統的な幼児教育機関として継承されてきた幼稚園と、戦後、孤児や保育に欠ける子どもに対し福祉的な機能として始まった保育所という二つの大きな柱は、2015年度から始まった子ども・子育て支援新制度が加わることで、新しい時代を切り拓こうとしている。そして、幼稚園と保育所両方を補完した新たな保育機関として認定こども園が増加しつつある（平成28年4月1日現在、4,001園）。このような日本の幼保一体化の動きは、少子化問題や待機児童問題、そして預かり保育等の社会問題だけでなく子育て支援の具体的な方策として行政が本格的に政策や方針を示したからである。日本は子ども・子育て支援新制度の導入に先立って、2007年、生涯教育を見据

えた教育の基礎の場として、幼稚園教育の目的を学校教育法の改正により明示した。翌年、2008年、これらの幼児期の遊びを通した学びの経験が児童期の自覚的な学びにつながるという観点により、幼稚園教育要領や小学校学習指導要領が改正され、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について議論がされるようになった。そして、2009年には、文部科学省と厚生労働省が「保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集」を作成し、それまで小1プログラムとして実施されてきた幼小接続に関する移行の問題を、幼小接続スタートカリキュラムとして本格的に言及するようになった。幼小接続スタートカリキュラムとは、「小学校へ入学した子どもが、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎とし

て、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラム」である。現在、全ての幼小において接続を意識した連携の取り組みが展開されている。しかし、実際の教育課程の実施においては、依然として幼児期の教育から小学校教育への学びの継続という接続関係の理解が不十分という課題も現存している。

そこで本稿では、教育の連続性や一貫性としての幼小接続の難しさを韓国で先行・実践されている幼小接続スタートカリキュラムの実態から学ぶことにより、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方を模索する。さらに、両国の幼小接続スタートカリキュラムの課題を検討する。

Ⅱ. 韓国における幼小接続スタートカリキュラム

韓国における幼小接続スタートカリキュラムは、日本の幼小接続スタートカリキュラム同様、5歳児の幼保一体カリキュラムとして始まった。OECDの参加国の幼児教育・保育政策に関する調査報告書等により、幼児教育・保育への公共投資が人材育成や国家の経済成長につながるという要因から、2012年、幼児教育の先進化政策の一つとして「幼児教育の機会提供」が掲げられた。そこで、教育の普遍性や均等化を図ることを基本にした「ヌリ課程」が、韓国の幼小接続スタートカリキュラムとして制定されたのである。「ヌリ課程」の「ヌリ」という言葉は、純ハングルの発音で「この世」という意味をもつ。一つの世の中、一つの人類、一つの世界、一つの共同体として、経済格差に関わらず全ての子どもに良質な教育の機会を提供することを基本に、子どもが思う存分、夢と希望を育てることができる社会の実現に向けた言葉である。つまり、韓国政府が国家の教育政策として、どれ程、強い思いをもって取り組んでいるのか、「ヌリ」の言葉に象徴されている。

新教育制度の実施に当たり、前年度である2011年、幼児教育法施行令や嬰幼児保育法施行令の改正と共に、財政を充当するための地方教育財政交付金法施行令の一部が改正された。そして、2012年3月から「満5歳児のヌリ課程」が本格的に始まったのである。翌年、その対象は3・4歳まで広げられ、2015年からは、全国の幼児教育機関で幼児期の平等な教育として実施されるようになった。1990年代から満5歳児と小1の教育の連携性を問い始めていたものが、「ヌリ課程」の導入により幼児期全般の教育の一環として幼小接続を考えるようになったのである。さらに、「ヌリ課程」の大きな特徴として、それまで分かれていた幼稚園とオリニジップの管轄を超え、幼稚園を管轄する教育部（日本の文部科学省に当たる機関）の財政で、オリニジップの保育までを包括するという教育福祉中心の統合がされたことである。従って、「ヌリ課程」の制定は、これまで二元化していたオリニジップの標準保育課程と幼稚園の幼稚園教育課程における満3歳児の教育課程を揃えることにより、就学

表1. ヌリ課程導入による教育課程の統合

	0－2歳	3－5歳	6－11歳
オリニジップ	標準保育過程	標準保育過程	
幼稚園		幼稚園教育課程	
小学校		ヌリ課程	初等教育課程

出典：韓国幼児教育・保育の現状と発展の課題（鄭晶姫,2015）
金加筆

前の教育を統一し、スタートラインを揃えたことにその意義がある（表1）。

1. 「ヌリ課程」導入まで

①新教育制度の背景から捉える

新教育制度としての「ヌリ課程」の導入背景には、幼児教育・保育の二元化による教育による格差を挙げることができる。つまり、家庭における子どもに対する教育費の経済的な負担を軽減し少子化問題を解決すること、さらに、所得階層間の教育の質による差を縮め良質な教育の機会を均等に与えることにより義務教育期間を事実上10年に確定することである。従って、急激に進んでいる韓国の少子化問題の解決、学歴社会の矛盾の立て直し、そして保育の質を保つための政策として取り組んできたといえる。

まず、2012年実施された「満5歳児ヌリ課程」の具体的な内容として示された5領域（身体運動・健康、意思疎通、社会関係、芸術経験、自然探求）では、小学校低学年の統合教科教育課程を意識した活動を重視した形として定められた。幼児期の経験や学びを子ども自ら挑戦できるような機会を考慮しつつ、その経験や学びが小学校でも継続して移行できるような「学びの継続性」を意識したものとなっている。実際、日本の幼小接続スタートカリキュラムにおいても、幼児期から児童期を学びの基礎力を培う時期として、連続性及び一貫性のある教育を行う必要があるとされている。これらにより、韓国の「ヌリ課程」や日本の「幼小接続スタートカリキュラム」の実施は、一方が他方に合わせるものではなく教育・保育課程の統合を図るという視点が同様であるといえる。

さらに、両国の教育・保育課程の統合は、幼児期の学びを通して小学校教育のスタートラインを保障することに大きな意味があるといえる。しかし、韓国の「ヌリ課程」の特徴として就学前の移行を意識した満5歳児に関しては、家庭での「しつけ」から学校機関における道徳教育を含めた子どもの望ましい人間性を培うための全人教育が重視されている。つまり、「ヌリ課程」の導入により、それまでリテラシーのような読み書きを中心とした韓国の幼児教育・保育が、子どもの主体性や創意性及び市民性を重視した教育へと、学びに対する視点が大きく変容したといえる。（表2）

表2. ヌリ課程の内容

	ヌリ課程の内容
基本方向	1. 基本生活習慣と秩序・配慮・協力など正しい人性教育（徳性を育てる） 2. 人と自然を尊重し、自国の文化理解 3. 全人発達がなされた創意的人材育成 4. 小学校教育過程へと移行を考慮した連携 5. 5領域を中心とした主体的経験と遊び中心の統合教育 6. 1日の保育時間は基本3～5時間
目 的	ヌリ課程は満3～5歳児に必要な基本能力と正しい徳性を育て、民主市民の基礎を形成することを目的とする
目 標	1. 健康な体を育て、基本運動能力と安全な生活習慣を養う 2. 日常生活に必要なコミュニケーション能力と正しい言葉の使い方を養う 3. 自ら自分の存在を尊重し、他の人々と一緒に生活する態度を養う 4. 美しいことに関心をもち芸術経験を楽しむことを通し、創意的に表現する力を養う 5. 周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもち、日常生活においても数学的・科学的に問題を解決する能力を養う
領 域	1. 身体運動・健康 2. コミュニケーション 3. 人間関係（社会関係） 4. 芸術経験 5. 自然探求

出典：韓国幼児教育・保育の現状と発展の課題（鄭品姫，2015）金下線加筆

このように両国の幼小接続問題の基盤には、幼児期の経験を生かした「学びの継続性」を重視しながら、子どもの主体性を中心に幼児教育・保育を充実しようとする抜本的な制度の試みがなされていることが分かる。

②幼児主導型のカリキュラムへと変遷

近年、韓国では子ども自ら学習目標を立て実践する「自己主導学習」が定着しつつある。つまり、子ども自ら学びの主体となる「幼児主導型」学習方法は、「自らを導く力（Self-leadership）」という考えの下で、韓国の幼小スタートカリキュラムである「ヌリ課程」の重要な根幹となっている。それは、子ども一人ひとりの力に応じた学習が能率を上げるだけでなく、これまで学校教育で先行されてきた教授学習法より教育の究極的な目標を実現し、学力向上につながるとされているからである。実際これまで韓国は、幼児期の教育として遊びを通した学びが重要であるとしつつも、多くの教育・保育現場では早期教育に連なるリテラシーを重視してきた。しかし、幼稚園教育課程5領域（健康生活、社会生活、表現生活、言語生活、探求生活）と、オリニジップ標準保育課程6領域（基本生活、身体運動、社会関係、意思疎通、自然探求、芸術経験）を統一した「ヌリ課程」の導入から、より子どもに必要な基本能力や素養を育てることが可能となる時間帯を午前中の活動と定め、毎日3～5時間、子どもの主体的な学びを中心とした活動が義務付けられた（表2）。つまり、毎日の遊びの中で様々なものに興味を抱き、直接触れる・感じる体験の場を重視する「幼児主導型」保育を試みるようになったのである。子どもの創意性が育まれるように、環境の中で自らの力を試す体験型の活動は、主体性を養うことを可能とする。これは、日本の環境を通した保育として遊びを中心とした直接的な関わりを大切にする視点と同様である。そして幼児期が「学びの芽生え」の時期であるとしたように、韓国においても遊びを通し「子どもの創造力や表現力、自信や社会性を身に付けること」を重視している。しかし韓国では、こ

れらの幼児期の教育・保育の統一化を図るために、「ヌリ教具・遊具の制作」や「ヌリ課程指導書」の配布等、「ヌリ課程」を指導する教員研修を徹底している。つまり、指導方法に準じた活動をどの教育・保育施設でも行えるように力を入れ、同一な学びの体験を全ての子どもに与えられるように工夫されている。そのため、一部ではヌリ教具や遊具、指導書による活動が画一的な学びになることを懸念する声もある。しかし、幼児主導型カリキュラムを基盤に国が公正な教育機会を保障するというシステムは、教育の格差を縮め幼児教育・保育の質を上昇させる効果になっているといえる。

③「ヌリ課程」の内容と実際

韓国の幼稚園やオリニジップでの「ヌリ課程」は、これまで記したように、経験中心及び体験中心の統合教育課程である。日本の幼稚園教育要領や保育所保育指針が、幼児期において同一内容として5領域を基本にしているのに対し、それまで分かれていた幼稚園教育課程やオリニジップ標準保育課程が、「ヌリ課程」の導入により統合されたことは、幼児教育・保育の質的水準の向上としての「公教育・公保育」の実現に向けた改革であったといえる。そのため、「ヌリ課程」の実施において、「満5歳ヌリ課程」、「3～5歳ヌリ課程」、「3～5歳年齢別ヌリ課程教師用指針書」、「3～5歳年齢別ヌリ課程解説書」、「ヌリ課程教師用指導書」、「オリニジップヌリ課程指導書」等、保育現場で活用できるような冊子が数多く出されている。その中、「3～5歳年齢別ヌリ課程教師用指針書」では、具体的な活動ができるように、生活主題のもと小テーマに分類されている。子どもの基本生活習慣や秩序、他人に対する配慮や協力等、人性教育及び創意性教育が重点に置かれている。総10巻からなる生活主題別（「①幼稚園／オリニジップと友だち」、「②私と家族」、「③私たちの町」、「④動植物と自然」、「⑤健康と安全」、「⑥生活道具」、「⑦交通機関」、「⑧我が国」、「⑨環境と生活」、「⑩春・夏・秋・冬」）の指導用冊子はⅠ部・Ⅱ部に構成され4～5歳にな

ると、これらに「世界の様々な国」という異文化の視点が加わる。Ⅰ部では、各主題の意味と概要、Ⅱ部では、教育活動としてどのようなねらいをもって展開されるのか、またその活動名及び指導方法や資料等が具体的に記されている。日本の幼稚園教育要領の解説書との大きな違いは、具体的な活動内容が、所要時間・用意するもの・教師の指導・援助や留意事項等、指導計画のように提示されていることである。

例えば、5領域の一つである「身体運動・健康」は、自分の身体を肯定的に捉え楽しく身体を動かすことを重視したものである。活動の単位として、3歳は身体に興味をもてるような活動を中心に構成され、4歳は活動を通し身体の機能を知ることになること、そして5歳なら、身体や健康に関する知識を身に付ける等、年齢による段階別学びを重視している。それは、「意思疎通」領域においても、「社会関係」や「芸術経験」、そして「自然探求」領域においても同様である。しかしこれらの指針書の使用頻度は、保育現場経験年数の長さや高学歴の幼稚園教師、もしくは国公立の幼稚園教師が高いとされ、保育教師（保育士）の使用頻度に課題がある。現在、韓国の幼稚園教師及び保育教師の資格取得は、法的根拠の二つの故、日本同様に資格の授与管轄が異なる。特に、両資格の取得履修単位数においては大きな差は見られないが、保育教師養成コースには、教職科目が含まれていない。そのため保育教師は、教師として必要な専門性を備える基本教科の学びの不備により、「ヌリ課程」のような新制度の導入による新たな教育課程や教材を通した教師の指導力及び応用力においては、保育実践の格差を生み出しているといえる。さらに教師用指針書では、子どもの育ちを様々な遊びを通し興味や関心に合わせた発見の喜びが生かされるように工夫されているものの、生活主題を基本とした小テーマ別の活動の制限により、「ヌリ課程」の内容が反映し難いことが指摘されている。従って、「ヌリ課程」が掲げている子どもの創造性が発揮できるような遊びの保障と共に、子どもと向き合う立場にいる幼稚園教師及び保育教師の指導力が求められる。これらのことから「ヌリ課程」の実現に向けて、幼児期における保育の質の保障、さらに保育の質を維持するための保育者の質の確保及び教員養成が不可欠であるといえる。

④生涯学習としての学びへの意識

2015年9月、韓国は大規模な教育課程の改定を通し、「人文的想像力」「科学技術への創造力」「全人教育を通した人創意融合型人材の育成」を掲げ、具体的な教育課程の内容を提示した。幼児期における新教育課程である「ヌリ課程」の導入は、小学校以降の教科書の見直し、大学入試制度、教員養成制度において全般的な変動をもたらす結果となった。そして継続的な学びや子どもの創造性を実現するため、2020年までに小学校から高等学校まで全ての学年に適応することを目標とした。特に

高等学校においては、これまでの文系・理系の分け方を取り止め、生徒の適性や進路に合わせた選択科目を用いるようにした。国語・英語・数学等の基礎教科が総履修単位の50%を超えないように義務付け（現行、90単位 → 改定後、84単位）、大学入試制度の根本的な見直しを試みた。中等教育においては自由学期制度を導入し、暗記中心の学び方から生徒自身が能動的に授業に参加していく学び方を重視するようになった。また、各学校の期末テスト等の絶対評価に対し、体験型教科活動を通した生徒自ら進路模索ができるような教育課程へと大幅な改正となった。そして、将来設計に集中するための教科活動を意識した協同学習やグループワークを通したディスカッションに比重を置くこととなった。日本の教育現場で重視されているアクティブラーニングの手法が韓国においても注目されるようになったのである。さらに、情報化時代に合わせ、ソフトウェア教育も教科の一つとして考え、「情報」科目においては「科学・技術／家庭／情報」を必須科目として定めること、毎週1時間（45分）授業として配分されることとなった。小学校においては、これまでの「ヌリ課程」との連携を強化し、さらに「安全教育」と「ハングル教育」が加わられた。特に、小学校低学年では「安全な生活」という教科を定め、国語や算数等の一般教科と連携し創意的な体験活動として取り入れられるようになった。これは、1989年日本の小学校教科の「生活科」を中心とした直接体験及び安全で適切な行動を重視したものと類似している。さらに国を愛する心を育むものとして「ハングル教育」を強化し、半期27時間以上（45時間）実施することから学びの時間を大幅増加する形となった。

このように2012年始まった「ヌリ課程」は、幼児期の教育課程を統合しただけではなく、幼小接続を意識したカリキュラムを始め、今はその後の教育課程に至るまで生涯学習としての学びの根幹にあるといえる。しかし日本の場合、学校基本法の改正（2006年）により幼稚園教育が生涯学習の始まりであるとされ、幼小の連続性が強調されたものの、その後の学びへの継続についてはあまり言及されていない。

2. 幼小連携の現況

①幼小連携の実際

韓国の幼児教育現場では、子どもにとっての小学校入学は、人生において大きな出来事であることを認識し、様々な形で小学校との連携を模索している。特に、子どもが入学を通し自分を取り巻く環境である教育機関が変わることにより不安を抱くことを考えると、教育現場が如何に移行過程を支えていくのが重要になってくる。小学校への進学に対し、子どもは「遊びに対する楽しさ」「成長に対する期待」「勉強に対する憧れ」「仲間に対する期待」「夢が叶う喜び」といった肯定的反応を示すと共に、「段階別の学習に対する恐れ」「学習に対する負担」「新

しい環境に対する不安」「攻撃的な仲間との出会いに対する心配」「規則を守れないかも知れないことへの危惧」等の否定的反応も抱くという結果から（チェ・ウンジョン、2012）、子どもの学校生活への順調な移行には、これまで重視されてきた学習のための知識的な準備より、学校生活全般に対する子どもの身体的・社会的・情緒的な準備が必要であることが明らかになった。また、2013年、幼稚園教師298名、小学校教師262名を対象に実施した幼小連携プログラムに関する調査からは、幼小連携において幼稚園教師は、「認知的な学習内容」「幼児主導型学習内容」「社会適応に関する内容」を意識して捉えているのに対し、小学校教師の方は就学前の学校教育に適應するための基本的な姿勢として「生活習慣及び態度に関する準備」を重視していることが明らかになった。また、「幼小連携のための学習指導水準」においては、幼稚園教師が小学校教師より幼小連携における子どもの学習指導に関心を示していた。しかし、幼児期の体験的な学習を小学校においても繰り返し指導することは、両方の教師とも子どもの学びにとって望ましいと考えていた。これらにより、「ヌリ課程」による生涯学習としての位置づけが、現在の幼小接続の連携を促進させていることが分かった。

幼小接続に関するこのような結果は、「学びに向かう力」を重視する日本の幼小接続の問題に類似している。特に、受け入れ側である小学校の方が幼児教育・保育施設よりも、集団生活をする上での基本姿勢を意識していることは、両国とも同様であるといえる。さらに、韓国においても、小学校教育における「自覚的な学び」に向け、生活習慣や文字・数等の直接的な学習準備に比重を置く傾向があり、両国がもつ幼小連携の課題であると考えられる。

②「ヌリ課程」導入後の連携の様子

現在、日本では、幼稚園や保育園、認定こども園で読まれた絵本の多くが、小学校の国語の教科書に収録されている。『おおきなかぶ』、『スイミー』、『かさじぞう』、『てぶくろをかいに』、『ごんきつね』等、園で読み聞かせやいろいろな場面で用いられた絵本は、作品として掲載されている。そして、これまで物語を楽しむことが主だった活動から、「主人公や登場人物の思いがどうだったのか」、「私は何を感じたのか」等、ストーリーを楽しむだけではなく文章として綴られている言葉の奥底の思いを理解することが求められる。さらに、段落を区分することにより、物語の構成を学ぶこともある。これは、小学校学習指導要領の「第2章 第3節 指導計画の作成と内容の取扱い」に示したように、「幼稚園教育における言葉に関する内容の関連を考慮する」という内容の実践といえる。

日本同様、韓国においても、幼児期に親しまれた絵本が小学校の教科書に多数収録されている。しかし、「ヌリ課程」の導入により、絵本の読み聞かせの後、物語の余韻を楽しむだけで

はなく、さらなる活動を通しより深めた内容を意識できるよう工夫がなされている。

例えば、幼稚園やオリニジップでは、読み聞かせの後「ヌリ教材」を用い、登場人物の特徴等を話し合う。そして、「ヌリ教具」を使用して具体的な登場人物の気持ちを想像してみる等、人との関係づくりの土台となる相手に対する思いやりや優しい気持ちが育つような工夫がなされている。この時、幼稚園教師や保育教師は、子どもの反応に留意しながら勇気と自信がもてるような言葉かけをすることが求められる（「私はあなたを信じているよ」「あなたが成し遂げると思っていたよ」「努力する姿を見たら誇らしく思えるよ」「あなたがやってみたいことをしたね」「誰でも失敗はするよ」「大丈夫だよ、先生がいるから」等）。次に、小学校1年生の国語の授業では、絵と文字との関連性を中心に内容を理解するだけでなく、自分に置き換えることから他のものに应用できる力を養うことが求められる。具体的には、読み聞かせを通し理解した内容を言葉や絵で表現した活動から、絵と文字に注目しながら自ら読み解き、さらに物語の内容から自ら気づき、学びを引き出すことに注目を置いている。そのため、小学校の国語の教科書は、子どもが文字や絵を記せるようなノート型になっており、付録として付いているシールや単語カードを用いる等、子ども一人ひとりの興味を引き出す児童主導型の教材になっていることも大きな特徴である。また、絵本の内容によって「国語」の単元で用いることもあれば、「数学」や「正しい生活（道徳）」、「賢い生活（理科）」等、それぞれの内容を深めるように用いられ、幼児期での学びを小学校での継続的な学びとして活用している。

このように、韓国では「ヌリ課程」を柱に学びの連続性を十分に生かした具体的な内容になっていることが分かる。それに対し日本は、小学校低学年において生活科を基本にしながら、国語・音楽・図画工作等の一部の教科を中心に他教科との連携を図り指導の効果を高めることが求められている。小学校学習指導要領では、「幼稚園教育要領の言葉・表現等の内容と関連しながら考慮する」と明示し、幼児期の経験や学びを意識しながら連携を図ろうとしていることが分かる。

しかし、韓国の子どもの創意性を育むことを教育の根幹において「ヌリ課程」が制定されていることを考慮すると、上記のような一律的な指導法で子どもの創意性を育てることが可能なのかは疑問である。さらに保育経験年数の短い幼稚園教師や保育教師においては、活動における教材準備の工夫、指導等を模索する方法を知らないまま保育実践となる危惧性がある。子どもの創意性や主体性を育てるための教師側の主体性について検討する必要があると考える。

3. 「リテラシー」教育から「幼児主導型」教育へ

①韓国の伝統社会から見た「リテラシー」教育

朝鮮時代の実学者の一人である李徳懋（1741～1793）の『士小節』では、子どもの文字教育の重要性が強調され、子どもの力量や年齢を考慮し、子どもが学んだことを自ら消化できるような学習量への配慮が大切であると説いている。当時、子どもの学び場であった書堂（日本の寺小屋に当たる朝鮮時代の私塾）では、千字文を中心に、教師である訓長が漢字を読み上げその意味を説き明かしたものを暗唱する「講読」、書物の漢詩を朗読し自ら詩作する「製述」、そして、漢字を正しく書く「習字」、これら三本を教育の基本としていた。特に、反復教育の基本である「講読」や「習字」においては、早期教育の重要性と共に発達における決定的な時期を見逃すことがないようにと、強調されていた。このような李徳懋の思想は、時代の変遷にも関わらず、韓国の幼児教育の現場でなされてきたリテラシー教育に通底するものがあると考えられる。しかし、李徳懋の早期教育思想には、暗記中心の教育と共に、子どもがその意味を理解するような学習者中心の教育の重要性も同様に論じている。しかし、近代、韓国のリテラシー教育を先頭とした詰め込み式教育の背景には、子ども自身の学びの充実が図れるような年齢や学習量への配慮はなされていない。それは、韓国社会における「遊ぶ」という言葉に対する偏見に起因していると考えられる。

韓国伝統社会では、「師匠の影も踏んではならない」程、教わる側が教える側に対する尊敬の眼差しがあった。それは、我が子に対し「大きくなって立派な人になるように」と、当時の親が教育に抱く期待から生まれた先生への尊敬を代弁する言葉であるといえる。つまり、立派な人となるためには、学びを施す側に対し敬う気持ちをもつことが、教わる側の姿勢であるように捉えていたのである。また、韓国の親は学校（園）に行く我が子に対し、「行っていらっしゃい」の挨拶の代わりに、「学校（園）に行ったら、先生の話をよく聞きなさい」「先生の言葉に従いしっかり勉強しなさい」と、挨拶をする。この言葉で分かるように、学習者の立場として、教える側の言葉が絶対的であることを考えると、教わる側の子どもの思いや考えは重要なものではない。つまり、「遊ぶ」ということは、立派な人になり得ない要因として解釈されやすい。

実際、「遊ぶ」という韓国語は、①楽しいことをして時間を過ごす・戯れる、②何もすることなくぶらぶらする・失業する、③勤めを（短期間・短時間）休む、④（勝手に）振舞う、⑤（固定されたものが）緩む・甘い、⑥（酒と女に）溺れる・浸る、⑦（人に動かされ）踊らされる、⑧（施設などが）放置される等の意味をもつ言葉である。つまり、韓国社会での「遊ぶ」とは、人をダメにする悪い誘惑のようなものであり、学びの過程を揺さぶる価値のないものとして解釈された文化が存在していたと考える。従って、早期教育を始め一斉的に教え込む教育を真正面から覆すような「遊びを通した学び」を掲げた「ヌリ課程」の導入は、これまで行われた韓国社会のリテラシー教育に

対する革新的な発想だったといえる。

これらにより、韓国で重視されたリテラシー教育は、李徳懋が提唱した子どもの力量や年齢を考慮したものを歪曲した形で定着されてきたといえる。そして「ヌリ課程」の導入により、韓国固有の教育思想からの学びに立ち返り、韓国伝統社会で重視されていたリテラシー教育を根本的に問い直す機会となっていることが理解できる。

②「幼児主導型」の捉えと保育者の役割

「幼児主導型」学習方法は、子ども自ら知ろうとする意欲を育てることにより、思考力や創造力、そして問題解決する力を養うことを目的とした学習方法である。結果重視ではなく、物事に取り組む過程を大事にするという考えから、子ども中心の保育であるといえる。しかし、「自らを導く力」は、人に内在するやる気や動機として表出され、その対象が幼ければ幼いほど内的動機を引き出すためには環境構成が重要な役割を果たす。それは、日本の幼児教育が「環境を通して行う教育」と提訴しているのとは一致する。

そこで、「幼児主導型」保育が子どもの自らの可能性を拓いていくものとして具現化されるためには、子どもの主体性と保育者の意図性や計画性がバランスよく絡み合うことが求められる。特に、朝鮮時代の李徳懋の思想からも分かるように、発達における決定的な時期を考慮することで子どもの内的動機が誘発され、そのタイミングを捉える保育者の関わりは重要なものとなる。

逃すことのできない絶好のタイミングという意味で使われる四字熟語、「啐啄同時」という言葉がある。「啐」は、①おどろく、②呼ぶ、③子どもをあやす声、④なめる等の意味をもつ。仏教では、鶏の雛が卵から産まれ出ようとする時、卵の内側から抜け出るためにつついて音を立てる行為を表す言葉である。次の「啄」は、①ついばむ、②たたく、という意味から、親鳥が卵から出ようとする雛の様子をすかさずキャッチして、その殻をついばんで破るという行為を表し、孵化を助けることを意味する。そのため、「啐啄同時」とは、同時に起きる「啐啄」の行為が、命の始まりを完全なものとするように、悟りを得ようとする弟子に師匠が教示を与えるという、時に合った師弟関係の学びを説いた言葉として用いられている。つまり、雛が孵化するためには、親鳥が卵を抱きかかえ温めるという期間が前提となる。さらに、雛が卵から完全に殻を破って出るためには、親鳥のタイミングを見てついばむという助け（協力）が如何に重要であるかを吟味しなければならない。そして、好機を見逃さず合わせていくという一連の流れに、孵化の時間が短縮されると考える。韓国において、子どもが自らの力を発揮する「幼児主導型」学習方法の在り方を模索する重要な心構えが潜んでいるといえる。

従って、良質な教育を通した人材育成が、先行学習や大量な教材をやりつくすことで終わらないように、保育者は親鳥のように孵化できる十分な環境を構成することが必要である。また、子どもの学びや発見の目を育てるタイミングを考えつつ、子ども自ら力を試すような「見守り」の姿勢、次に子どもを分かろうとする理解者（sympathizer）としての役割が求められる。さらに、子どものことを学ぼうとする学習者（learner）として、共に生きることを実現するための教師教育の構築が早急に必要であると考ええる。

4. 「ヌリ課程」の遂行における二つの課題

2000年以後、韓国は質の高い教育を目指し教育課程の改革と改定を繰り返してきた。子どもの望ましい人間性を培うための「全人教育」を柱とする「ヌリ課程」は、教育の公正的な機会を揃えることとなった。さらに、これまでの幼稚園とオリニジップにおける子どもの学びの格差を減らすことにより、公教育の均等化が実現された。これは、家庭における教育費の軽減を目指した無償化教育の実現である。しかし、「ヌリ課程」実施後、徐々に浮上した無償化による国の財政問題や受け皿となっている地方自治体の問題は、特に2016年から深刻化し、地域によってはやむを得なく廃園に追い込まれる教育・保育施設、それによる保育に欠ける子どもの浮上等、さらなる問題が台頭している。子どもの良質な公教育の機会を与えようとして始まったものが、十分な財政の確保と見通しをもたないまま続行したことによる弊害が今になって大きな課題となっていると考える。従って、幼小接続を考慮した教育・保育制度や政策、そして教育・保育課程等の推進のためには、それらをバックアップできる財政の確保が重要であるといえる。

次に、「ヌリ課程」は、国際的な幼児教育の影響を受け、全ての子どもに均等な教育の実践を迅速にカリキュラム化した。そのため、十分な検討期間を設けず短期間で作り上げたことによる画一的な教育課程の押し付けという指摘がある。つまり、「ヌリ課程」の根幹にある「幼児主導型カリキュラム」の普及の神髄について検討の必要がある。「ヌリ課程」の導入により、政府は「ヌリ課程」の実践が、どの教育・保育施設でもスムーズに取り入れられるように保育時間を確保するだけでなく、ヌリ教具・遊具の制作やヌリ課程指導書の配布等を通した学びの統一化を図った。しかし、その後、各出版業界が我を先にと、子どもの「幼児主導型」学習方法を掲げ、様々な出版物を発行した。現在、教育・保育施設だけでなく家庭においても、氾濫した幼児主導型教具・遊具の中で子ども達はもまれていく。学び手である子ども側の興味や関心に添った教育として、保育者や保護者が如何に子どもの気づきや興味を示す時を待っているかを問わなければならないのである。そのためには、子どもの教育・保育だけではなく、子育て世代の保護者教育の検討

も必要になってくる。従って、教育・保育における新制度の導入や展開において保育現場では、ある程度の教育効果は現れている。しかし、個々の家庭においては、「ヌリ課程」が目指す「幼児主導型」の教育が理解されるまでには至っていない。それは、氾濫されているヌリ教育・遊具による「幼児主導型」の過誤な捉え及び、多様化した家庭の育児が起因していると考えられる。

Ⅲ. 考察とまとめ

「ヌリ課程」の導入により、「全人教育」に向け幼小接続を意識した教育課程や教科書の見直しは、その後の学びの過程である大学入試制度、さらに、子どもの教育に携わる教員養成制度まで全般的な変動をもたらす結果となった。未だ過渡期であることを考慮すると、制度や形式等に拍車をかけるだけではなく学び手である子どもの真の学びとして必要なものを吟味しなければならない。

これまで、韓国教育社会で根強くあった読み書きを中心としたリテラシー教育は、現教育・保育現場では詰め込み式教育の先駆的な方法として解釈され、遊びを通した体験型教育に相反するものとして扱われていた。しかし、リテラシーとは、単に「正しく読んだり書いたりできる識字率」という意味合いだけではなく「表現されたものを適切に理解し、それらを改めて適材適所で表現する」という二次的な意味があることを見過ごしてはならない。つまり、リテラシー教育の在り方を見直すことにより自分の考えを表現し、集団の中で相互に学び合うことが究極的な学びを成就する手立てとなることを考慮しなければならない。さらに、幼小接続においても、相互が学びの過程を尊重しながら子どもの学びの継続性を理解する姿勢が求められる。

次に、世界各国の幼児教育・保育の動向から、「ヌリ課程」による良質な教育機会の提供は、財政支援と共に優秀な保育者・教員養成にかかっていることが分かる。しかし、学びの当事者である子どもが、主体的な学びを通し自ら経験した探究の過程を築けるようになるためには、保育者・教員の質の問題を看過できない。それは、子どもの学びや育ちとは何かを問うことであり、子どもの視座に立ち生活者としての姿勢をもった人材としての保育者・教員を如何に確保するかにかかっているといえる。社会情勢の変化に伴い幼児教育・保育現場に対する制度や基準が目まぐるしく変動する中、子どもの育ちを補う保育者・教員養成においては、その対策が追いついていない。つまり、幼児教育・保育の制度や情勢に合わせた保育者・教員養成のタイミングが必要なのである。

実際、両国においては、様々な幼児教育・保育制度の変遷があり、遊びを中心とした幼児期の学びが理解されるまでには時間がかかった。そして保育現場は、幼児教育・保育制度が変わる度、それに対する保育の考え方や方法を吟味するということが課せられた。しかし、保育者自身が初めて出会う教育・保育

方法で子どもを保育することは、制度が追求した神髄の学びになり難い。従って、学びの連続性を重視した「幼小接続スタートカリキュラム」として、両国の教育・保育制度が良質な教育を通した子どもの真の育ちを考えたものになるべきである。保育者・教員養成を担う期間の中で、時代に流されるような教育・保育内容や方法を取得するだけに留まってはならない。また単に、教育・保育技術の育成に重点を置くのではなく、保育者や教員自らの探求心や創意性がもてる養成教育が必須といえる。

最後に、教育・保育制度の確立に向けては、財政の拡充も事実上必要であるが、公教育を目指した「ヌリ課程」が財政難により充実する手段が失われることは見過ごせない。子どもの良質な公教育を目指した政策を維持していくための発想の転換が求められる。さらに、少子化により家庭の教育力が低下した子育て世代の保護者に対しても「ヌリ課程」による「幼児主導型」学習方法の真意を受け伝えていかななくてはならない。

これらのことから、韓国の幼小接続スタートカリキュラムである「ヌリ課程」の実状から、円滑な接続の在り方の可能性を提示し、教育・保育制度として掲げた「幼児主導型」の意味を明らかにした。さらに、保育者・教員養成だけでなく家庭教育への疑問を投げた。そして、これらの視点は、日本が幼小接続スタートカリキュラムを推進していく中で勘案すべき内容であるといえる。

追記

本稿は、2015年11月から2016年4月まで教育新聞「幼小接続スタートカリキュラム」の連載の一部を加筆・修正したものである。

引用文献

- (1) 認定こども園の数について - 内閣府子ども・子育て本部 (平成28年6月6日の資料)
www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/ensuu.pdf
- (2) 幼児教育・幼小接続に関する現状について - 文部科学省 (平成27年11月28日の資料)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_3/053/siryo/_icsFiles/fieldfile/2015/05/25/1358061_03_01.pdf
- (3) 幼小接続・座長試案 - 文部科学省 (平成22年12月の資料)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/shiryo/attach/1299926.htm
- (4) 生涯教育の始まり - 3～4歳ヌリ課程に期待する - 乳児政策Brief - 乳児政策研究所 (平成24年3月1日の資料)
- (5) http://www.kicce.re.kr/kor/newsletter_mail/policy_info/201203_newsletter/brief.pdf
- (6) 「5歳ヌリ課程」導入に関する法令改正公布 - 教育科学技術部 (平成

23年9月30日資料)

http://edpolicy.kedi.re.kr/EpnicTrend/Epnic/EpnicTrendVw.php?LstCary=B00802&id=12360&SOURCENAME_2=&PageNum=10&SearchWord=%B4%A9%B8%AE%B0%FA%C1%A4&SearchMode=&sdate=&edate=&check=&ContCate=&attachId=

- (7) チュ・ウンヨン (2016) ヌリ課程施行以後の幼児教育財政の変化及び今後の課題. 韓国ヨルリン幼児教育学会. ヨルリン幼児教育研究. 第21巻第1号. 2016 Vol. 21. No. 1. pp.51-68
- (8) チョン・ジョンヒ (2014) 韓国幼児教育・保育の現状と発展の課題. 日本保育学会第68回大会
http://jsrec.or.jp/wp-content/uploads/2015/05/9_af138004fcea8a274b56019f1f54b4.pdf
- (9) キム・ウンソル、チョ・ヘジュ、イボラ (2011) 育児支援機関行・財政体系の統合推進のための短・中期戦略. 育児政策研究所. 研究報告書
- (10) 教育科学技術部・保健福祉部 (2012) 3～5歳ヌリ課程解説書. 教育科学技術部告知第2012-16号. 保健福祉部告知第2012-82号
- (11) チュ・ウンシル (2013) 自己主導学習 - 国家生涯教育振興院 (平成25年1月31日の資料)
- (12) 教育科学技術部. 保健福祉部 (2013) 3～5歳ヌリ課程教師用指針書
- (13) キム・ミンヒ (2015) ヌリ課程研究の動向分析. 韓国保育支援学会誌. 第11巻第3号2015 Vol. 11. No. 3. pp.149-167
- (14) 教育科学技術部 (2016) 2015年改訂教育課程案内リーフレット
- (15) チュ・ウンジョン (2012) 小学校移行に見られる満五歳児の情緒に関する研究. 淑明女子大学校. 教育大学院: 幼児教育専攻 (2012. 8)
- (16) アン・ヨンヘ (2013) 満五歳児の小学校適応プログラムが学校準備度には及ばず影響. 韓国要幼児保育学. 2014 Vol. 87. pp.51-82
- (17) シム・ジョンヨル (2008) 李徳憲の『『士小節』『童規』篇による教育方法の研究. 漢文学論集第27輯. pp.153-186
- (18) 国立国語院. 標準国語大辞典
http://stdweb2.korean.go.kr/search/List_dic.jsp

参考文献

- (1) ウォン・スンリョン (2004) 幼稚園・小学校の連携教育に対する小学校教師の認識及び実態. 慶南大学校教育大学院. 修士論文
- (2) バク・ゼムン (2004) 李徳憲の『『士小節』に関する研究: 教育学的解釈. 道德教育研究. 第16巻1号pp.159-183
- (3) これからは「5歳ヌリ課程」 - 教育科学技術部 (2011年7月14日の資料)
http://edpolicy.kedi.re.kr/EpnicTrend/Epnic/EpnicTrendVw.php?LstCary=B00802&id=12098&SOURCENAME_2=&PageNum=11&SearchWord=%B4%A9%B8%AE%B0%FA%C1%A4&SearchMode=&sdate=&edate=&check=&ContCate=&attachId=
- (4) 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(平成23年11月の資料)
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf
- (5) 報道資料. 幼稚園・オリニジップにおけるヌリ過程の導入による実態と財政状況 (2013年11月8日の資料)
<http://news.noworry.kr/1918>
- (6) 小田豊 (2014) 幼保一体化の変遷. 北大路書房.
- (7) チョン・デヒョン、イム・ヒス (2016) 小学校1年児童が知覚するヌリ課程と初等教育課程の連携経験. 生態幼児教育研究. 第15巻第2号. pp.251-271
- (8) 報道資料. ヌリ課程の成功、教師の役割にある. ボラリス (2016年6月19日の資料)
<http://www.mypola.com/Pages/News/HotIssue/View.aspx?pnIdx=77>